

『古代アメリカ』16, 2013, pp.85-100

<調査研究速報>

先コロンブス期アメリカ大陸史に関する世界史教科書の 記述はどう変わったのか

—新学習指導要領に沿って改訂された高等学校世界史教科書の検証—

青山和夫（茨城大学人文学部）

坂井正人（山形大学人文学部）

井上幸孝（専修大学文学部）

井関睦美（明治大学商学部）

長谷川悦夫（埼玉大学教育機構非常勤講師）

嘉幡茂（ラス・アメリカスプエブラ大学人類学科）

松本雄一（山形大学人文学部）

1. 先コロンブス期アメリカ大陸史に関する高等学校世界史教科書の記述の改善を目指して

メソアメリカとアンデスという先コロンブス期アメリカ大陸の二大文明を十分に語ることなくしては、世界史における諸文明の多様性に対して目をそむけることになりかねない。なぜならば古代アメリカの二大文明は、旧大陸と交流することなく、いわゆる「四大文明」と同様に一次文明を独自に形成したからである〔青山2007〕。古代アメリカに関する研究と歴史教育は、旧大陸や西洋文明と接触した後の社会からは得られない視点や知見を人類史に提供し、従来の「四大文明」・西洋中心的な文明史観ではない新しい歴史的知の構築に大きく貢献する。ところが、今なお学術研究と一般社会の持つ知識の隔たりは大きい。その一因は、15世紀以前の南北アメリカ大陸の文化や歴史に関する世界史教科書の記述が、ユーラシア大陸と比べて、質量共に極めて貧弱なことである〔青山2007: 13-14; 多々良2005; 吉田2006〕。

教育基本法が2006年に約60年ぶりに改正され、学校教育法の一部が改正されたことを踏まえて高等学校の学習指導要領が改訂された。21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点から、教育の新しい理念が定められた。さらに教育基本法の改正を受けて学校教育法において、新たに義務教育の目標が規定されると共に、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の目的・目標規定が改正されたことを十分に踏まえた学習指導要領の改定が求められた〔高等学校学習指導要領 平成21年3月 文部科学省〕。

2008年12月6日の古代アメリカ学会総会において、青山を座長とする「学術情報の普及に関わる戦略ワーキンググループ（以下WG）」が役員会のもとに発足し、高等学校教科書問題をはじめマスコミ報道の改善と対応、研究成果の一般社会への還元等を検討した〔青山他 2009〕。その後、WGの活動は同一の5名のメンバーで組織する「学術情報の普及に関わる戦略検討」班に引き継がれた。検討班は、高等学校世界史教科書における先コロンブス期アメリカ大陸史の記述を改善するために、計9社の24冊の教科書と世界史用語集を精査して、最近の調査成果が反映されていない時代遅れの情報、誤った事実や不適切な記述を検討した。そして、古代アメリカ学会役員会と会員と共にメール会議を通して教科書修正案を練り上げ、古代アメリカ学会事務局から2010年8月に教科書会社9社に送付した〔青山他2010a, 2010b〕。

学習指導要領改訂後の教育課程が2013年4月から高等学校で実施されるのに先立ち、高等学校の教科書が大幅に改訂された。世界史は、地理歴史科共通の必修教科目である。高校生は地理歴史のうち「世界史A」及び「世界史B」のうちから1科目並びに「日本史A」、「日本史B」、「地理A」及び「地理B」のうちから1科目を履修する。「世界史A」が標準単位数2単位で近現代史を中心に学習するのに対し、「世界史B」は4単位で古代から現代までの世界の歴史の基本的な事項を学習する。

高等学校世界史の改定の要点としては、「世界史A」では、①導入時期の学習における地理・日本史との関連付けと、中学校社会科との接続に配慮した内容構成、②近現代の歴史を一層重視した内容構成、③諸資料に基づく学習を重視した内容構成、④主題を設定させ、探究する活動の充実の4点である。「世界史B」の改定の要点は、①導入時期の学習における地理・日本史との関連付けと、中学校社会科との接続に配慮した内容構成、②世界史の中での日本の位置付けに留意した内容構成、③主題を設定して行う学習を全ての大項目に設定の3点である〔高等学校学習指導要領解説 地理歴史編 平成21年12月 文部科学省〕。

本稿では、WG・検討班のメンバーであった青山、坂井、井上を含む、科学研究費プロジェクト「環太平洋の環境文明史」（平成21～25年度）に研究代表者・分担者として参加する古代アメリカ学会の会員7名が、2013年4月から高等学校で使用されている世界史の新課程教科書において先コロンブス期アメリカ大陸史に関する記述はどのように変わったのかについて速報として報告する。「環太平洋の環境文明史」プロジェクトでは、環太平洋の非西洋型諸文明（メソアメリカ、アンデス、琉球列島、オセアニア等）と環境史の精緻な比較研究から新しい歴史的知を構築することが一大目的である〔青山2012a, 2012b: 137-147〕。とりわけ、研究成果の普及と歴史教育への貢献は、本プロジェクトの重要な使命になっている。

本稿では、古代アメリカ学会の修正案に従って新課程教科書がどのように改善されたのか、あるいは改善されなかったのかについて具体的に論じて、古代アメリカ学会の内外で情報の共有を図りたい。教科書が大幅に書き直されることによって、新たに生じた問題点も散見される。先コロンブス期アメリカ大陸史に関する世界史教科書問題の改善をさらに促進するために、そうした問題点についても指摘し、修正案を提示する。筆者らが検討した高等学校世界史の新課程教科書は、計6社の13冊（「世界史B」4冊、「世界史A」9冊）である^(註1)。紙面の都合上、そのうち、標準単位数4の「世界史B」を刊行した4社と「世界史B」を刊行せずに標準単位数2の「世界史A」を刊行した2社の計6冊（「世界史B」4冊、「世界史A」2冊）の新課程教科書の改善点、問題点と修正案を例示していく。

2. 山川出版社『詳説世界史』（世界史B）

山川出版社『詳説世界史』の新課程教科書では、新学習指導要領に沿って導入時期の学習における地理との関連付けに配慮して、従来の「第1章 オリエンと地中海世界」の前に「第1部 概観」が新たに加えられた。最も重要な改善点は、第1章の「自然環境と文明」の項目においてユーラシア大陸だけでなく「またアメリカ大陸の中部・南部では、主としてトウモロコシやジャガイモが栽培され、独自の都市文明が誕生した」と古代アメリカについても記述されていること、及び地図「おもな古代文明とその遺跡」で旧大陸の「四大文明」と共に、「マヤ文明」、「アステカ文明」、「インカ文明」が示されていることである。これは、従来の「四大文明」中心的な文明史観の脱却を目指す、よりグローバルで均整のとれた歴史記述といえよう。ただし「アステカ文明」よりも「アステカ王国」、「インカ文明」よりも「インカ帝国」が、より一般的な表現である。将来的には、アメリカ大陸の一次文明として「メソアメリカ文明」と「アンデス文明」と記述すべきであろう。さらに古代アメリカの初期文明において都市と文明は同一視できないので、「独自の都市文明」は「独自の文明」に修正すべきである。

新課程教科書の「第1部 第2章 アジア・アメリカの古代文明」の「4 南北アメリカ文明」は、旧課程教科書から変更されることなく「アメリカ先住民」と「マヤ・アステカ文明とインカ文明」の2つの項目のままである。これは、アメリカ大陸の多様性に富んだ諸文明を同一視・混同する「インカ・マヤ・アステカ」シンドローム [青山2007: 13] を助長しかねない世界史の語りであり、新課程教科書でもまだ改善されていない。旧課程教科書では「4 南北アメリカ文明」の記述は2ページ弱であったが、新課程教科書ではカラー写真「マチュピチュ」が新たに掲載されて計2ページになった。一方、旧課程教科書の巻頭カラー写真「テオティワカン遺跡の太陽のピラミッド」が、新課程教科書では削除された。

古代アメリカ学会の教科書修正案に従って本文が改善された箇所としては、たとえば「中央アメリカのメキシコ高原や南アメリカのアンデス高地では」が「メソアメリカ（現在のメキシコと中央アメリカ）と南アメリカのアンデス地帯では」、「アメリカ大陸の都市文明としては、オルメカ文明が前1000年ころまでにメキシコ湾岸で成立し」が「アメリカ大陸では、前1200年頃までにオルメカ文明がメキシコ湾岸で成立し」、「中央アメリカのユカタン半島には、4世紀ころから9世紀にかけてマヤの都市国家が栄え」が「ユカタン半島には、前1000年頃から16世紀にかけてマヤ文明が展開して、4世紀から9世紀に繁栄期をむかえ」、「絵文字」が「マヤ文字」、「前2世紀にテオティワカン文明がうまれた」が「前1世紀にテオティワカン文明がうまれた」等を指摘できる。また「青銅器は南アメリカのみ」という誤った記述が削除された。地図「アメリカの古代文明とおもな遺跡」では、「チチェン=イツァ」が「チチェン=イツァ」、オルメカ文明のカラー写真のキャプション「巨大人面彫刻」が「巨人人頭像」に改められた。

メソアメリカ文明の記述は、総体的に大幅に改善された。とりわけ、グアテマラのセイバル遺跡で前1000年頃に建造されたマヤ低地で最古の公共祭祀建築と公共広場に関する新知見 [青山2012c, 2013; Inomata et al. 2013] が反映され、マヤ文明の起源が古典期の「4世紀」ではなく「前1000年頃」に修正されたことは特筆に値する。対照的に、アンデス文明に関する記述はあまり改善されなかった。たとえば、「アンデス高地では、前1000年頃に北部にチャビン文化が成立して以降」ではなく「中

中央アンデスでは、前2500年頃に神殿の建築が始まって以降、「インカの文明は、けわしい山岳地帯につくられた都市マチュ=ピチュの遺跡」ではなく「インカ帝国は、けわしい山岳地帯につくられたマチュ=ピチュ遺跡」、「国王（インカ）は太陽の化身とされた」ではなく「国王（インカ）は太陽の子とみなされた」と直すべきである。

スペインによるアステカ王国とインカ帝国の征服については、旧課程教科書では「第II部 第9章 近代ヨーロッパの成立」の「1 ヨーロッパ世界の拡大」で、新課程教科書では「第3部 第8章 近世ヨーロッパ世界の形成」の「1 ヨーロッパ世界の拡大」で記述される。前者の「アメリカ大陸への到達」という項目名が、後者では「アメリカ大陸の征服」に改められた。また従来の「スペイン王室は、「征服者」（コンキスタドル）の率いる軍隊をアメリカ大陸におくりこみ」の前に、新課程教科書では「アメリカ大陸には先住民による諸国家が形成されていたが、」が付け加えられた。なお、カラー図版「アステカ王国の滅亡」の説明文にある「現在のメキシコシティ」は「現在のメキシコ市」と記すべきである。

3. 東京書籍『世界史B』

東京書籍の『世界史B』では、「第1編 さまざまな地域世界 第7章 古アメリカ世界」の記述は、新課程教科書と旧課程教科書の両方において3ページであり、4つの項目からなる。従来の「メキシコ高原と中央アメリカ」、「アンデス地方」、「北米大陸の文化」の3項目に加えて、旧課程教科書の「アステカ帝国とインカ帝国」が、新課程教科書では古代アメリカ学会の教科書修正案に従って「アステカ王国とインカ帝国」に改められた。新課程教科書では、新学習指導要領に沿って導入時期の学習における地理との関連付けに配慮して、巻頭の「世界史のとびら」において「1 自然環境と世界史の舞台」が新たに設けられ、「各地の農耕文化」の項目で「アンデス高地」がカラー写真「ペルーでのトウモロコシの収穫」と共に紹介されている。

古代アメリカ学会の教科書修正案に従って、本文の記述が随所で改善された。たとえば、「3万年前、ベーリング海峡が陸続きであったころ」が「1万2千年以上前、ベーリング海峡が陸続きであったころ」になった。「メキシコ高地とアンデス高地では、前1千年紀のはじめに神殿を中心とした都市建設がはじまり、その後、メキシコ高原、ユカタン半島、アンデス高地に生まれた諸文明は、複数の巨大石造都市をつぎつぎとつくりあげた」が「メキシコ湾岸とアンデス地方では、前1千年紀には神殿を中心とした都市が成立しており、その後、メキシコ高原、ユカタン半島、アンデス地方に生まれた諸文明は、複数の巨大石造都市をつぎつぎとつくりあげた」に改善されたが、「メソアメリカとアンデスでは、それぞれ前2000年紀、前3000年紀までに神殿を中心とした社会がはじまり、その後、両地域に生まれた文明は、複数の巨大な都市をつぎつぎとつくりあげた」に直すべきである。

従来の「温帯半乾燥のメキシコ高原のインディオたちは、前1500年ごろから夏作雑穀で乾燥に強いトウモロコシを栽培する独自の農耕文化を生み出し、定住社会をつくっていった」の「前1500年ごろから」という年代が「前2000年紀から」に改められたが、差別用語の「インディオたち」は「先住民」と記すべきである。オルメカ文明の起源と宗教については、「前9世紀になると、メキシコ湾岸地域に（中略）聖獣ジャガーや聖鳥ケツァルを信仰するこの文明はオルメカ文明とよばれ、その後の中央アメリカ諸文明に大きな影響を与える」が「前1200年ころになると、メキシコ湾岸地域に

（中略）聖獣ジャガーなどを信仰するこの文明はオルメカ文明とよばれ、その後のメソアメリカの諸文明に大きな影響を与える」に書き直された。

テオティワカン文明とマヤ文明の関係については、「このメキシコ高原の都市文明は中央アメリカのユカタン半島に伝わり、紀元前後ごろマヤ文明が成立した」が「このメキシコ高原の都市文明は中央アメリカのユカタン半島に伝わり、前4世紀ごろマヤ文明が成立した」に改善されたが、「このメキシコ高原の都市文明に先立ち、ユカタン半島を中心に前1000年ごろからマヤ文明が形成された」に改められるべきである。先古典期マヤ文明は、テオティワカンの影響下ではなく独自に成立している。「マヤ文明では、絵文字で飾られた石造建築（中略）農業では、従来からの焼き畑だけでなく、灌漑をとまなう定住農耕が行われていたと考えられている」が「マヤ文明では、文字で飾られた石造建築（中略）農業では、従来からの焼き畑だけでなく、灌漑をとまなう定住農耕が行われていたと考えられている」と「絵文字」が「文字」に直されたが、文末の「と考えられている」を削除すべきである。

「このマヤ文明は、10世紀にメキシコ高原のトルテカ族の侵入によって滅んだ」が「このマヤ文明は、10世紀にメキシコ高原のトルテカ人の侵入を受けた」と差別的な「トルテカ族」が「トルテカ人」に修正されたが、「マヤ文明がトルテカ人の侵入を受けた」という実証的な根拠はないので「このマヤ文明は、10世紀にメキシコ高原のトルテカ文明とも交流した」と記述すべきである。アステカ文明については、「10世紀になると、メキシコ高原では、トルテカ族やチチメカ族が古典文明を継承して、新たな都市文明を発展させた。12世紀ごろこの地に移住してきた狩猟民のアステカ族は、諸都市を服属させてゆき、14世紀には現在のメキシコシティの地に首都テノチティトランをつくり、王国を建てた。この王国は16世紀初頭には、メキシコ湾岸から太平洋岸までを支配下におさめるアステカ帝国に発展した」が「10世紀になると、メキシコ高原では、トルテカ人やチチメカ人が古典文明を継承して、新たな都市文明を発展させた。12世紀ごろこの地に移住してきたアステカ人は、14世紀には現在のメキシコ市の地に首都テノチティトランをつくり、諸都市を服属させて王国を建てた。この王国は16世紀初頭には、メキシコ湾岸から太平洋岸までを支配下におさめるアステカ王国に発展した」に書き直された。

アンデス文明に関しては、古代アメリカ学会の教科書修正案に従って顕著に改善された。たとえば、「エクアドルやペルーなど温帯夏雨のアンデスの高地では、メキシコ高原からトウモロコシの栽培文化が伝わると定住化がすすんだ。前10世紀には美しい土器をもつチャビン文化が成立し、紀元前後には、宗教的な色彩の濃い都市文明に発展し、神殿がつくられた。その後、アンデスの高地では大規模な灌漑設備がつくられ（中略）やがてティアワナクの都市がアンデス高原一帯につくられた」が「アンデスでは、メソアメリカからトウモロコシの栽培文化が伝わり、定住化、リヤマ、アルパカの家畜化がすすみ、前2500年頃から各地に神殿が建てられ、宗教的な色彩の濃い文明が発展した。その後、アンデスでは大規模な灌漑設備がつくられ（中略）やがてティアワナクの祭祀建造物がアンデス高地につくられた」、「アンデス地方では、ティアワナコ文明のち諸王国が抗争したが、ケチュア族がしだいに勢力を増し、15世紀初頭には広大な地域を支配するインカ帝国を建設した。インカの王は太陽の子とみなされ、絶大な宗教的権力をふるった」が「アンデス地方では、ティアワナクの都市の繁栄のち諸王国が抗争したが、ケチュア人がしだいに勢力を増し、15世紀には広大な地域を支配するインカ帝国を建設した。インカの王は太陽の子とみなされ、絶大な宗教的権力を

ふるった」に書き直された。ただし、「ティワナク」を「ワリヤティワナクといった」、「諸王国が抗争した」を「抗争の時代を迎えた」、「ケチュア人」を「インカ」、「絶大な宗教的権力」を「権力」に改めるべきである。

カラー写真「テオティワカンの遺跡 中央奥の太陽のピラミッドを中心に巨大な神殿建造物がならぶ。太陽のピラミッドは太陽神をまつる高さ65mの祭壇である」が「テオティワカン遺跡 中央奥の太陽のピラミッドを中心に巨大な神殿建造物がならぶ。太陽のピラミッドは高さ64mの基壇である」に改善された。

新課程教科書「第3編 一体化する世界 第13章 大交易時代」の「アメリカの征服」の項目では、旧課程教科書の「アステカ帝国を滅ぼしてノヴァ=イスパニア州を建設し」が「アステカ王国を滅ぼしてヌエバ=エスパニヤを建設し」に改められた。

古代アメリカ学会の修正案に従って教科書が改善されなかった問題点と修正案としては、「のちにヨーロッパ人によってインディオ（インディアン）とよばれる人々」ではなく「のちにヨーロッパ人が誤解してインディオ（インディアン）と名付けた人々」、「馬やラクダなど大型獣は知られず、車両も利用されなかったが、アンデスでは高地に強いリヤマ、アルパカなどが運搬に用いられた」ではなく「馬などの大型獣は知られず、車両も利用されなかったが、アンデスでは高地に強いラクダ科動物のリヤマが運搬に用いられた」、「アメリカ大陸で農耕文化が発展したのは、メキシコ高原と中央アメリカ、それにアンデス高地の3か所であった」ではなく「アメリカ大陸で最初に農耕文化が発展したのは、メソアメリカとアンデスの2か所であった」、「これらメキシコ高原と中央アメリカの文明は、メソアメリカ文明と総称される」ではなく「これらメキシコと中央アメリカの文明は、メソアメリカ文明と総称される」等が挙げられる。たとえばオルメカ文明は、メキシコ湾岸を中心に栄えたからである。

4. 実教出版『世界史B』

実教出版の新課程教科書『世界史B』では、執筆者を11名から14名に増員した上に、旧課程教科書の執筆者3名を除いて大幅に入れ替えた。章節構成が変わり、本文自体が大きく書き直されている。旧課程教科書『世界史B新訂版』では、「第1部 序章 文明社会への道すじ」の「文明の時代へ」において旧大陸の諸文明だけが記述され、古代アメリカの諸文明には全く触れていなかった。新課程教科書では、「第1部 諸地域社会の形成 序章 ビッグバンから人類の出現へ」が、新学習指導要領に沿って導入時期の学習における地理との関連付けに配慮した内容構成になった。序章の「2 人類の誕生」の「農耕・牧畜のはじまり」において「このようにして、最古の文明がメソポタミアで成立し、のちにナイル川、インダス川、黄河、長江などの大河流域で、またそれよりもややおくれてアメリカ大陸でも独自の文明が形成された」という一文が新たに追加されたが、「それよりもややおくれて」を削除すべきである。アンデス文明の起源は、前3千年紀に溯る。同様に、実教出版の新課程教科書『世界史A』と『新版世界史A』の巻頭地図「おもな古代文明」及び『世界史A』「第1部 ユーラシアの諸文明と交流 序章 文明のはじまり」の地図「世界のおもな古代文明」では、旧大陸の「四大文明」と共に、「メソアメリカ文明」と「アンデス文明」が世界地図に示されており、従来の「四大文明」中心的不是で、よりグローバルで均整のとれた文明史観が明示されている。

旧課程教科書『高校世界史B』では、「第1部 諸地域社会の形成 第4章 アメリカ大陸と太平洋」の「1 アメリカ大陸」は、「農耕のはじまり」、「メソアメリカ文明」、「アンデス文明」の3つの項目からなり、その記述は計3ページであった。新課程教科書『世界史B』では、ページ数は同じく3ページであるが、「第1部 諸地域世界の形成 第5章 アフリカ世界と南北アメリカ世界」の「2 南北アメリカ先住民」は、「南北アメリカ大陸の文明」、「北アメリカの先住民文化」、「中央アメリカの先住民文化」、「アンデス地方の先住民文化」の4つの項目と囲い込み記事「世界史の探究 コロンブス交換」で構成される。「北アメリカの先住民文化」は、メソアメリカのオルメカ文明、テオティワカン文明、トルテカ文明、アステカ王国に加えて、アメリカ合衆国のプエブロ等の北米先住民にも触れている。「中央アメリカの先住民文化」は、マヤ文明について記す。本文中のカラー写真としては、「トムロコシの収穫」、「オルメカ文明の石製人面」、「テオティワカンの遺跡」、「プエブロの集合住宅」、「マヤ文明のレリーフ」（コパン遺跡の「祭壇Q」）、「マチュ=ピチュ」の6枚が豊富に掲載されている。なお参考までに、オルメカ文明の図版については、本教科書の解説書（教員用指導書）を井上が執筆した際、教科書会社とのやり取りの結果、平成26年度からは巨石人頭像に差し替えられることになった。

古代アメリカ学会の教科書修正案に従って、誤った事実が修正された箇所が顕著に認められる。たとえば、「前1500年ごろには、トムロコシを主とし、豆・カボチャなどを栽培する農耕が発展した」が「農業では、前2000年紀までに主作物のトムロコシ・ジャガイモなどを栽培する農耕が確立した」、「メキシコ湾岸のタバスコ・ベラクルス地方で、前1000年ごろ、石造神殿や石像彫刻に特色をもつ都市文明が形成され、絵文字・暦もつくられた。これはオルメカ文明とよばれる。この影響のもとに、紀元前後ごろから、メキシコ中央高原のテオティワカン文明や、グアテマラ・ユカタン半島のマヤ文明が発達した」が「前1200年ごろ、メキシコ湾岸地方では、絵文字をもち、聖獣ジャガーを信仰するオルメカ文明が形成され、石造彫刻やピラミッド型の神殿がつけられた。この文明は、その後のメキシコ高原や中央アメリカの文明に大きな影響を与えた」に改められた。

マヤ文明に関しては、「当初グアテマラ盆地で神殿都市をつくり栄えたマヤ族は、テオティワカン勢力におされユカタン半島に移ったが、文字・アーチ工法・天文観測などを発達させた。―（中略）―マヤ文明圏はトルテカにおされ、10世紀なかごろには中心地がユカタン半島北部に移り、マヤ=トルテカ様式の美術をうんだ」が「マヤ族は、紀元前からユカタン半島を中心に、階段ピラミッドなどをそなえた石造建築の都市を数多く建設し、またマヤ文字とよばれる絵文字（象形文字）を用いた。このマヤ文明は、テオティワカン文明とも交流しながら、3世紀から9世紀にかけて最盛期をむかえ、高度な天文観測にもとづく精密な暦をつくり、ゼロの概念を用いた二十進法による数学も発達させた。10世紀にはトルテカ文明とも交流したが、マヤの諸都市は統一されることなく、16世紀にはいつてスペインに征服された」に改善された。ただし、「マヤ族」を「マヤ人」、「マヤ文字とよばれる絵文字（象形文字）を用いた」を「マヤ文字とよばれる表語文字と表音文字を用いた」と改めるべきである。

アステカ文明については、「12世紀に南下したアステカ（メシカ）族は、14世紀に水の都テノチティトランを建設した」が「この地に南下してきたアステカ族は、14世紀に湖上の都市テノチティトラン（現メキシコ市）をたて」に直されたが、「アステカ族」は「アステカ（メシカ）人」と記すべきである。

アンデス文明に関しては、「ペルー中央高地でも、前1000年ごろから、チャビン文明とよばれる初期都市文明が形成された。これが基礎となって、紀元1000年紀、中央アンデスで都市文明が開花し、8世紀から高地のティアワナコとワリが周囲に大きな影響を与えた」が「アンデスでは、前2500年ごろから石造の神殿がたてられるようになり、前800年ごろには、チャビン文明が成立した。その後、7世紀にはいるころには、高地のティワナクなどが周囲に大きな影響を与え、中央アンデスに都市文明が開化した」に修正されたが、「チャビン文明」を「チャビン文化」、「ティワナク」を「ティワナコとワリ」に直すべきである。さらに「15世紀なかごろから、ペルー南部高地のクスコを中心に、ケチュア族のインカ帝国が発展し、アンデス一帯を支配下においた」が「15世紀なかごろから、高地南部のクスコを都にインカ帝国が発展し、アンデス一帯に勢力を拡大した」、「帝国は、16世紀前半王位継承をめぐる2分し、1532年に再統一されたが、翌年、スペイン人ピサロの軍に征服された」が「インカ帝国は帝位継承をめぐる内紛のさなか、1533年、スペインのピサロによって皇帝アタワルパが処刑され、滅亡した」に改善された。新課程教科書では、地図「南北アメリカ大陸の諸文明」において、旧課程教科書の「マチュピチュ」が「マチュ=ピチュ」、「ティアワナコ」が「ティワナク」というより一般的な表現に改められた。

新課程教科書では半ページのスペースを割いて囲い込み記事「世界史の探究 コロンブス交換」のコラムが追加されたが、これは第3部第9章で扱われるべきテーマである。さらに西洋人の歴史観に基づいた「交換」という表現は、征服／被征服、支配／被支配というヨーロッパ人とアメリカ大陸先住民の関係性を念頭に置いて、動植物、食物、奴隷を含む人口、病原体、鉄器、銃、思考体系といった世界の生態系、農業、文化の歴史に広範囲かつ非対称的に及んだことを考慮に入れば教科書記述としては相応しくない。

アメリカ大陸の征服については、旧課程教科書では「第II部 諸地域世界の交流と再編 第9章 ヨーロッパ世界の拡大」の「2 ヨーロッパ勢力の海外進出」の「商業・植民活動の展開」において「スペインは、アメリカ大陸を侵略し、中米のアステカ王国、南米のインカ帝国を滅ぼした」と記述されていた。新課程教科書では、「第3部 一体化にむかう世界 第9章 近世ヨーロッパと大航海時代」の「1 ヨーロッパの海外進出」の「スペインのアメリカ支配」において「ヨーロッパ勢力進出以前のアメリカには、独自の高度な文明が栄えていたが、スペインの武力によって次々に征服された。コルテスは1521年、メキシコのアステカ王国を征服し、ピサロは1533年、ペルーのインカ帝国を征服した」と記され、質量共に記述が改善された。

なお新課程教科書『世界史B』では、本文が大幅に書き直されることによって新たな問題点が生じたので修正案を提示したい。たとえば、「およそ3万年前、ベーリング海峡が陸続きであったころに、東北シベリアからアメリカ大陸へと狩猟民が移動し」の「およそ3万年前」ではなく「1万2千年以上前に」、「メキシコ高原では、1世紀ごろからテオティワカン文明が発展し（中略）しかし、7世紀に衰退がはじまり」ではなく「メキシコ高原では、前1世紀ごろからテオティワカン文明が発展し（中略）しかし、6世紀に衰退がはじまり」等が挙げられる。新たに掲載されたカラー写真「テオティワカンの遺跡」の説明文「テオティワカンとは、「神々の家」を意味する」は「テオティワカンとは、「神々の場所」を意味する」、カラー写真「ブエプロの集合住宅」の説明文中の「アナサジ族」は「アナサジ人」とそれぞれ記すべきである。メソアメリカ、アンデス文明以外の北米先住民の文化も記述されたことは特筆すべきことであるが、今後は北米のみならず、メソアメリカとアンデス

以外の中南米の先住民文化も同様に記述されることが望ましい。

5. 帝国書院『新詳 世界史B』

帝国書院『新詳 世界史B』の「1部 諸地域世界の形成と交流 序章 人類の出現」の「文明の誕生」の項目では、旧課程教科書の「最古の文明は、メソポタミア南部で成立し、やや遅れてナイル川、インダス川、黄河・長江などの大河流域でも同様に文明が成立した。またアメリカ大陸では、高原や山ろくに、独自の文明が生まれた」の「高原や山ろくに」が、新課程教科書では古代アメリカ学会の教科書修正案に従って「平野だけでなく高原や山ろくに」に改められた。

ところが、コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明に関する記述は、新課程教科書においても、旧課程教科書と同様に、「1部 諸地域世界の形成と交流」では、上記の一文以外は全くない。アメリカ大陸の諸文明が主に記述されるのは、「2部 海洋による世界の一体化 2章 大規模な分業体制の成立」の「1 大航海時代～世界の一体化の始まり」においてである。それは、「アメリカの『発見』」の項目に続く僅か1ページにしかすぎない。この記述量は、上記の他社の『世界史B』の教科書だけでなく、次に述べる二社の『世界史A』の教科書よりも少ない。帝国書院『新詳 世界史B』に描かれるアメリカ大陸の諸文明は、ヨーロッパ人によって「発見」され植民地化された「敗者の文明」として「世界史」の語りにおいて付随的なものになっているのが問題である。

古代アメリカ学会の教科書修正案に従って、旧課程教科書の「アメリカの伝統文明」という項目が、新課程教科書では「アメリカの諸文明」に変更された。旧課程教科書の「アメリカ大陸では、古くから独自の文明が栄えていた。しかし、大航海時代になって、ヨーロッパ人が来航すると、これらの文明は破壊される」の2番目の文章が、新課程教科書では「しかし、大航海時代になって侵略したヨーロッパ人によって、これらの文明は破壊された」に直された。しかし、新課程教科書の「かれらはとうもろこしの栽培を農業の基礎とし」は「かれらはとうもろこしやじゃがいも等の栽培を農業の基礎とし」に直すべきである。

オルメカ文明については、「中央アメリカのメキシコ湾沿岸では、紀元前にオルメカ文明とよばれる文化圏が広範囲に成立した」が「中央アメリカのメキシコ湾沿岸では、紀元前1200年ごろから、オルメカ文明が成立した」に修正されたが、「中央アメリカの」を削除すべきである。テオティワカン文明に関しては、「前2世紀ごろから紀元後6世紀ごろにかけては、絵文字や石づくりのピラミッドを残したテオティワカンが繁栄した」が「前1世紀ごろから紀元後6世紀ごろまで、絵文字や石づくりのピラミッドを残したテオティワカンが繁栄した」に改善されたが、文字があまり発達しなかったテオティワカンにおいて「絵文字」をあえて挙げるのは不適切といえよう。

マヤ文明については、「またユカタン半島を中心に、4世紀からはマヤ文明が栄えた。15世紀に分裂して衰えるまで、金属器は使われなかったが、象形文字（マヤ文字）や太陽暦が用いられた」が「また、前6世紀からユカタン半島を中心にマヤ文明が栄え、象形文字（マヤ文字）や太陽暦を用いたが、鉄器は使われなかった。この文明は15世紀に衰退した」になった。しかし、「象形文字（マヤ文字）を「マヤ文字」、「15世紀」を「16世紀」、さらに地図「南北アメリカ大陸の風土」の「チチェン・イツァ」を「チチェン・イツァ」に直すべきである。

インカ帝国に関しては、古代アメリカ学会の教科書修正案に従って「14世紀から南米アンデスの

高原都市クスコを中心に栄えたインカ帝国は、皇帝を太陽の化身（インカ）としてあがめていた」が「15世紀から南米アンデスの高地都市クスコを中心に栄えたインカ帝国は、皇帝を太陽の子（インカ）としてあがめていた」、「キープ（結縄）とよばれる縄文字」が「キープ（結縄）とよばれる記録・伝達手段」に改善された。本文中のカラー写真では、「マチュ=ピチュの遺跡 インカ帝国の首都であったとされるクスコの」が「マチュ=ピチュ遺跡 インカ帝国の首都クスコの」、「山にある都市遺跡」が「山にある遺跡」に改められた。

新課程教科書の問題点としては、アステカ王国に関して「14世紀前半に湖上の島にテノチティラン（現メキシコシティ）を建設して」とあるが、「（現メキシコシティ）」を「（現メキシコ市）」と記すべきである。また巻末の「世界史対照表」が、従来の表から改善されていない。たとえば、旧課程教科書と同じく「インカ帝国は1150年頃に成立した」となっているが早すぎる。「15世紀半ば頃」に直すべきである。また、この年表によれば、「インカはアステカよりも早く滅亡した」ように示されているが、これも修正されなければならない。新課程教科書では、巻頭に「世界の自然環境」が新たに加えられ、カラー写真「森林 マヤ文明遺跡」としてチチェン・イツァ遺跡の写真が掲載された。しかし、「このチチェンイツァ遺跡は熱帯雨林の中に築かれた」という不正確な説明文は、「このチチェン=イツァ遺跡は熱帯サバンナの中に築かれた」に書き直すべきである。また上述の実教出版『世界史B』と同様に、本教科書では、旧課程教科書に続き新課程教科書でも囲み記事において「コロンブスの交換」が説明されているが、ヨーロッパ人がもたらした疫病など悪影響の記述が削除されており、あたかも平和的な交換であったかのような誤解を生む記述になっている。

6. 清水書院『高等学校世界史A最新版』

コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明は、清水書院の旧課程教科書『高等学校世界史A改訂版』では「第2編 一体化する世界 第1章 「大航海時代」の「3 アメリカの植民地」における「古代アメリカ文明の特質」という一項目の僅か9行で「敗者の文明」として付随的に記述されたにすぎなかった。旧課程教科書『高等学校世界史B改訂版』では、コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明の記述はさらに短く、「第4章 地域世界の変容と世界の一体化」の「44 「大航海」は世界をどのように変えたのか」における「アメリカとの出会い」という一項目のたった6行しかない。さらに「第2章 君たちの時代 9 古代文明はどのように探究されたのか」では、「四大文明の発見」の項目に如実に表れているように、旧大陸の古代文明にしか言及されておらず、地図「世界の古代文明」にも「四大文明」が強調されていた。

清水書院は、高等学校世界史Bの新課程教科書を2013年に刊行しなかったため、以下、新課程教科書『高等学校世界史A最新版』と旧課程教科書『高等学校世界史A改訂版』について論じる。新課程教科書では、古代アメリカの記述が質量共に顕著に改善された。「第1篇 ユーラシアの文明の交流」の扉の地図「人類の拡散と文明圏」では「四大文明」という記述はなく、旧大陸の諸文明と共に「メソアメリカ文明」と「アンデス文明」が明示されている。しかし、「文明圏」は「文明」に直すべきである。さらに新課程教科書では、アメリカ大陸の諸文明の記述は2ページに増えた。それは「第1編 ユーラシアの文明の交流 第1章 ユーラシアの諸文明」というユーラシア中心的な章の最後の「◎ユーラシアをこえて アメリカ大陸」において、「アメリカ大陸の自然環境」、「メソアメ

リカ文明とアンデス文明」、「新大陸とよばれて」の3つの項目から構成される。コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明に関連するカラー写真は、旧課程教科書ではテオティワカン遺跡の「太陽の神殿」（「太陽のピラミッド」）の1点しかなかったが、新課程教科書では「テオティワカン遺跡」、「マチュピチュ遺跡」、「湖上の島に築かれたテノチティトラン」、「マヤのトゥモロコシの神」、「インカの段々畑」の計5点が豊富に掲載され、新学習指導要領に沿って諸資料に基づく学習を重視した内容構成になった。さらに巻末の年表では、旧課程教科書では存在しなかった「南北アメリカ・オセアニア」が追加された。

古代アメリカ学会の教科書修正案に従った本文の改善点としては、たとえば「メキシコ高原には都市テオティワカンやピラミッドが建設されていたが」「メキシコ高原の文明は、前1世紀ごろには、巨大なピラミッド型神殿群を残した」、「南アメリカではアンデス高原一帯にインカ帝国が勢力をもち」が「15世紀になると、アンデス一帯を支配するインカ帝国が形成された」、「南北アメリカの古代文明は、いずれも鉄器文化の段階には達していなかった」が「金、銀、銅は豊富に用いたが、鉄器は使わなかった」となる等の修正がある。また旧課程教科書の扉の地図「アメリカ大陸」の説明文「南北アメリカ大陸には紀元前1000年以前にやってきたモンゴロイドが先住民として暮らしていたが、15世紀にスペイン人、ポルトガル人、フランス人、イギリス人が相次いでやってくる」という不正確な記述が削除され、新課程教科書では「◎ユーラシアをこえて アメリカ大陸」の地図「アメリカ大陸」の説明文として「中南米地域では、16世紀以降、ヨーロッパ人と先住民との文化が混交し、のちにはアフリカから奴隷として連れてこられた黒人たちとの文化も混入して、独自のラテンアメリカ社会が形成された」が挿入された。

新課程教科書の記述量が増えたのに伴い、新たな問題点が生じたので修正案を提示したい。「およそ3万年前、北アジアにいた人類の一部は、大型動物を追って陸続きだったベーリング海峡を渡り、北アメリカに入った」とあるが、「大型動物」ではなく「大小の動物」、「およそ3万年前」ではなく「1万2千年以上前」に修正すべきである。テオティワカン文明とマヤ文明の関係については、「この文明はユカタン半島にも伝わり、石造都市や天体観測にもとづく精密な暦を生み出したマヤ文明に受け継がれた」とあるが、「この文明に先立ち、ユカタン半島を中心に、石造都市や天体観測にもとづく精密な暦を生み出したマヤ文明が栄えた」と書き直すべきである。

アステカ王国については、「メキシコ高原から中央アメリカにいたるこの文明圏（メソアメリカ文明）は、12世紀以降、アステカ族に服属するようになり、15世紀までにメキシコ全域を勢力下におくアステカ帝国が形成された」ではなく「メキシコ高原から中央アメリカにいたるこの文明（メソアメリカ文明）は、政治的に統一されることがなく、15世紀にはメキシコ中央高原を中心にアステカ王国が形成された」に直すべきである。「1万年前から紀元後16世紀まで展開したこれらの文明は、ユーラシアとは異なる特徴をもっていた」とあるが、「1万年ほど前から紀元後16世紀まで展開したこれらの諸文化は、ユーラシアとは異なる特徴をもっていた」に改めるべきである。また、カラー写真のキャプションと地図「アメリカ大陸」の「マチュピチュ」は、「マチュ＝ピチュ」というより一般的な表現に直すべきである。巻末の年表の「南北アメリカ・オセアニア」では、「アステカ帝国」ではなく「アステカ王国」、「中央アメリカでマヤ文明おこる（～後16世紀）」のが「4世紀」とあるが「前1000年頃」とすべきである。

7. 第一学習社『高等学校世界史A』

第一学習社は、高等学校世界史Bの新課程教科書を2013年に刊行しなかったため、新課程教科書『高等学校世界史A』と旧課程教科書『高等学校改訂版世界史A』について検証する。第一学習社『高等学校世界史A』では、上述の清水書院『高等学校世界史A最新版』以上に、コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明の記述が質量共に改善された。旧課程教科書では「第3章 一体化する世界 1 大航海時代の世界」の「③ アメリカ大陸の変貌」において、「アメリカの古代文明」という一項目の中でアメリカ大陸への人類の移住から16世紀のスペイン人の侵略までの歴史が僅か1ページで付随的に記述されていた。

新課程教科書では、新学習指導要領に沿って「世界史A」の導入時期の学習として地理と歴史への関心や学習意欲を高め、世界史を学習する意義に気付かせるために、「第1編 世界史へのいざない」が新たに設けられた。旧課程教科書にはなかった重要な改善点としては、まず巻頭に「ユーラシアの諸文明」と名付けられた世界の諸文明の年表が新たに掲載され、「アメリカ」にマヤ文明、アステカ王国、インカ帝国が明記されていることである。「第1編 世界史へのいざない 1 自然環境と歴史」の「2 人と自然環境とのかかわり」では、地図「世界なおもな文明」が新たに掲載され、旧大陸の「メソポタミア文明」、「エジプト文明」、「インダス文明」、「黄河文明」、「長江文明」と共に、アメリカ大陸の「マヤ文明」、「アステカ王国」、「インカ帝国」が示されている。

旧課程教科書では、「前近代のユーラシアの歴史」は大項目として記述されていたが、新課程教科書では、新学習指導要領に沿って「第2編 世界の一体化と日本」という大項目の中の中項目として「ユーラシアの諸文明」が設けられ、16世紀以降の近現代史を理解するための前提として明確に位置付けられた。その結果、新課程教科書ではそれぞれの文明の特質を大きくとらえさせるように工夫され、コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明自体の記述が2ページに増えた。それは、「第2編 世界の一体化と日本 第1章 ユーラシアの諸文明」でユーラシアとアフリカの記述に続く「7節 アメリカ」に置かれ、「二つの文明圏」、「メソアメリカ文明圏」、「アンデス文明圏」の3つの項目と「マヤの暦」と「ナスカの地上絵」の2つの囲み記事から構成される。しかし、「文明圏」は「文明」に直すべきである。とりわけ、旧課程教科書にはなかったナスカについての記述が特筆に値する。コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明に関連するカラー図版は、旧課程教科書では「テノチティトランの市場」と「マチュピチュの遺跡」の2点だけであった。新課程教科書では「マチュピチュ」、「アメリカ大陸の文明圏」、「マヤ文字」、「マヤの暦」、「ナスカの地上絵」、「キープ」の計6点が掲載され、新学習指導要領に沿って諸資料に基づく学習を重視した内容構成になった。しかし、「文明圏」は「文明」に改めるべきである。

スペイン人の侵略については、旧課程教科書では「第3章 一体化する世界 1 大航海時代の世界」の「③ アメリカ大陸の変貌」において、「先住民社会の激変」という一項目が1ページで語られていた。新課程教科書では、「第2編 世界の一体化と日本 第2章 結びつく世界と近世の日本」の「8節 アメリカ大陸の変容」は、「スペインによる征服とアフリカ系奴隷の導入」と「コロンブスの交換」という2つの項目の計2ページに増えた。質量共に記述が改善され、新学習指導要領に沿って近現代の歴史を一層重視した内容構成になった。ここでは、スペインによる征服史だけでなく、アメリカ大陸から広がった重要な食用作物やヨーロッパからアメリカ大陸に導入された植物や動物

についても詳しく記している。図版は、従来の「イタリアのトマト料理」、「ジャガイモが添えてあるドイツ料理」と「ラス＝カサス」の3枚に加えて、「鉱山で働かされる先住民」、「中部メキシコの先住民人口の推移」、「キャッサバを調理する人々」、「アメリカ大陸原産植物の伝播」、「キューバのサトウキビ畑」の計8枚に大幅に増えた。

古代アメリカ学会の教科書修正案に従って、誤った事実が修正された箇所が顕著に認められる。たとえば「前1000年ころにはメキシコ高原や南アメリカのアンデス高地で、トウモロコシを主要作物とする農耕文化をつくりあげた」が「前2千年紀には、メキシコから中央アメリカにかけてのメソアメリカや、南米のアンデスにおいて、トウモロコシを主要作物とする農耕文化をつくりあげた」、「4世紀ころから、中央アメリカのユカタン半島でマヤ文明が栄えた。ここでは、ピラミッド風の神殿がたてられ、象形文字や太陽暦が使われ、数学も発達していた」が「前6世紀ころから、ユカタン半島を中心にマヤ文明が栄えた。各地にピラミッド型の神殿がたてられ、マヤ文字や太陽暦が使われ、数学も発達していた」、「アンデス高地では、15世紀にインカ帝国がクスコを都として繁栄していた。インカの皇帝は太陽と信じられ」が「アンデスではまた、15世紀にインカ帝国が栄えた。インカ帝国の皇帝は太陽の子とされ」に修正された。

また、スペイン人の侵略に関する記述も大幅に増えた。「アメリカの古代文明では鉄器や馬が知られていなかったので、16世紀前半に、わずかな兵士を率いたスペイン人コルテスによってアステカ王国が、スペイン人ピサロによってインカ帝国が滅ぼされた」という旧課程教科書の短い記述が、「16世紀前半、スペイン人は中南米を征服した。1521年にコルテスがメキシコのアステカ王国を、1533年にピサロが南米のインカ帝国を滅ぼした。鉄器も大型の家畜ももたないアメリカの文明に対して、銃をもち馬に乗ったヨーロッパの征服者は軍事的に優位であった。また、彼らは現地の政治的混乱に乗じて先住民同志を戦わせた。スペイン人がもちこんだ天然痘などの疫病も大きな打撃となった。疫病に対し免疫をもたない先住民の多くが、短期間のうちに命を落とした。そのため数百人の征服者が、数十万の人口をもつ帝国をたやすく征服することができた」と質量共に改善された。将来的には最後の文章を「そのため数百人の征服者が、数十万の人口をもつ帝国を征服することが可能であった」と修正すべきであろう。

カラー写真「マチュピチュの遺跡（ペルー） アンデス山中にあるインカ帝国の都市遺跡で、1911年に発見された。標高2500mの天然の要害の地に、神殿・広場・住居・水道などが整然と配置されている」が、「マチュ＝ピチュ（ペルー） アンデス山中にあるインカ帝国の遺跡で、1911年に発見された。標高2400mの天然の要害の地に、神殿・広場・住居・水道などが整然と配置されている」に改められた。

新課程教科書の記述量が増えたのに伴い、新たに生じた問題点と修正案としては、「今から1万5千年前、シベリアにいたアジア系の狩猟民が、獲物を追ってアメリカ大陸にわたった」ではなく「今から1万2千年以上前、シベリアにいたモンゴロイドの狩猟民が、獲物を追ってアメリカ大陸にわたった」、「メキシコ高原では、14世紀に成立したアステカ王国」ではなく「メキシコ高原では、15世紀に成立したアステカ王国」、「ナスカ人は、空からしか見ることでできない巨大な地上絵」ではなく「ナスカ人は、地上からも見ることのできる巨大な地上絵」等が挙げられる。地図「アメリカ大陸の文明圏」は「アメリカ大陸の文明」、地図上の「チチェン＝イツァ」は「チチェン＝イツァ」、カラー写真「マヤのピラミッド（メキシコ、チチェン＝イツァ）高さ24m」は「マヤのピラミッ

ド（メキシコ、チチェン=イツァ）高さ30m」と記されなければならない。囲み記事「マヤの暦」の説明文では、マヤ暦とアステカの時間の概念を混同した誤った記述がある。「5125年を1周期とする長期暦もあった（中略）この5125年を1周期として、一つの世界が誕生・成長・終焉すると考えた。彼らの考えによれば、今の世界は第5番目の世界であり、その誕生は前3114年であったという」は、「約5126年を1周期とする長期暦もあった（中略）この約5126年を1周期として、新たな長期暦が循環する。彼らの考えによれば、現在より一つ前の長期暦は、前3114年に開始した」に書き直すべきである。

8. まとめ

先コロンブス期アメリカ大陸史に関する高等学校世界史の新課程教科書の記述は、教科書会社によって温度差があるものの、古代アメリカ学会の教科書修正案に大なり小なり従う形で改善された。また3社の「世界史B」の教科書では、新学習指導要領に沿って導入時期の学習における地理との関連付けに配慮した内容構成になった。「世界史A」の教科書では、新学習指導要領に沿って諸資料に基づく学習を重視し、コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明に関連するカラー図版が大幅に増えた。特筆すべきは、新課程教科書において「四大文明」という、日本の高校世界史教科書に1952年に登場した世界的にみても珍奇で時代遅れの世界史の語りが皆無になったことである。大部分の新課程教科書では、コロンブス以前のアメリカ大陸の諸文明は、ヨーロッパ人によって発見され植民地化された「敗者の文明」としてだけ付随的に語られるのではなく、「諸地域世界の形成」において主体的に登場するようになった。一部の新課程教科書では、古代アメリカの記述が質量共に顕著に改善された。

新学習指導要領に明記されているように、高等学校世界史は、詳細で専門的な世界の歴史を学ばせようとするものではなく、高校生の歴史的思考力を培うことを目指した科目である。高校生の学習の負担を増加させないためにも、先コロンブス期アメリカ大陸史に関する教科書の記述量を増やすのは今すぐには難しいであろう。しかしながら、最近の調査成果が反映されていない時代遅れの情報、明らかな事実関係の誤認や不適切な記述があれば、教科書会社に辛抱強く指摘し続ける努力を怠ってはならない。2010年に教科書会社9社に送付した古代アメリカ学会の修正案では、教科書の記述内容に関する明らかな誤りを指摘することに重点を置いたが、将来的には質量共にさらなる書き直しを促す必要がある。

先コロンブス期アメリカ大陸の歴史教育を改善していくためには、古代アメリカ研究者は学術研究と一般社会のもつ知識の隔たりを埋めるように努力し続けなければならない。優れた研究成果を生み出し続けて、国内だけでなく諸外国でも学術論文を出版すると共に、良質な新聞やテレビ・ラジオ番組、良心的な一般雑誌、一般市民にもわかりやすい一般書、公開講演会、一般向けシンポジウム等を通じて日本社会に還元し続けて、知の再生産が効果的に行われるように努めていくことが重要といえよう。そして社会的認知と高い評価を得て、日本政府や一般社会が、研究投資の価値をより明確に認識するようしていく必要がある。

歴史教育への貢献と研究成果の普及は、古代アメリカ学会と会員、そして全ての歴史研究者の重要な使命である。筆者らが生きている限り、そして次の世代の研究者たちが、長期的な展望に立っ

て、アメリカ大陸と旧大陸の古代文明を対等に位置付け、よりグローバルで均整のとれた世界史に近づけていかなければならない。そして、古代アメリカをきちんと教育する学習指導要領が策定されるように、古代アメリカ学会、研究者として文部科学省と教科書会社に働きかけていく必要がある。筆者一同、引き続き積極的かつ熱心に関与していきたい。

【謝辞】

本稿は、平成21-25年度科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表青山和夫）と平成21-25年度科学研究費補助金基盤研究(B)「マヤ文明の政治経済組織の通時的変化に関する基礎的研究」（代表青山和夫）の成果の一部である。査読者から極めて有効かつ建設的なコメントをいただいた。記して感謝申し上げます。

註

- (註1) 2013年に検討した高等学校世界史の新課程教科書は、山川出版社の『要説世界史』、『現代の世界史』、『世界の歴史』、『詳説世界史』、東京書籍の『世界史A』、『世界史B』、実教出版の『新版世界史A』、『世界史A』、『世界史B』、清水書院の『高等学校 世界史A 最新版』、第一学習社の『高等学校 世界史A』、帝国書院の『明解新世界史A』、『新詳 世界史B』の計6社の13冊である。

引用文献

青山和夫

- 2007 『古代メソアメリカ文明 マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ。
 2012a 「環太平洋の環境文明史：趣旨説明」『札幌大学附属総合研究所 BOOKLET』6: 5-11。
 2012b 『“謎の文明” マヤの実像にせまる』NHK 出版。
 2012c 『マヤ文明 密林に栄えた石器文化』岩波新書。
 2013 『古代マヤ 石器の都市文明 増補版』京都大学学術出版会。

青山和夫・吉田栄人・坂井正人・井上幸孝・多々良穰

- 2009 「古代アメリカの学術情報の普及—高等学校世界史教科書問題、マスコミ報道の改善、研究成果の発信と還元—」『古代アメリカ』12: 95-103。

青山和夫・坂井正人・井上幸孝・吉田栄人・多々良穰

- 2012a 「日本の歴史教育における先コロンブス期アメリカ大陸史とよりグローバルな「真の世界史」」『考古学研究』57(3): 15-19。

青山和夫・多々良穰・坂井正人・井上幸孝・吉田栄人

- 2012b 「先コロンブス期アメリカ大陸史に関わる世界史教科書問題」『古代アメリカ』13: 31-39。

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Víctor Castillo, and Hitoshi Yonenobu

- 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340: 467-471.

多々良穰

2005 「高校生のマヤ・イメージとマヤ文明の授業実践」『歴史と地理』589: 17-25, 山川出版社.

吉田栄人

2006 「日本におけるマヤ・イメージの消費構造—高校生・大学生・放送大学生に対するアンケート調査からの一考察—」『古代アメリカ』9: 1-23.

原稿受領日 2013年9月19日
原稿採択決定日 2013年10月7日